広瀬川の利用と保全政策の現状と地域住民の評価

東北工業大学　　稲村　肇
東北工業大学　学生会員　○大平　真広

１．はじめに

仙台市内を流れる広瀬川は、市民に親しまれ、四季を通じて市民が憩いの場として利用している。しかし、その整備は必ずしも十分でなく、利用できる空間は限られ、荒れたままで放置されている個所も少なくない。こうしたことから仙台市や市民団体がさまざまな取り組みを行っているが、それらの活動が有効に機能しているとは限らない。本研究では、こうした市や市民の意見や活動の現状をアンケート調査し、河川近くの住民による、河川敷・河川遊歩道の現状、施設の整備、保全施設の評価を検証していく。

２．都市内一級河川に対する施策

現在、日本の一級河川には、さまざまな施策が行われている。国は法律(河川法)に基づき、県は条例に基づき、市ではそれに準じた施策を行っている。本研究では宮城県の条例と他県との比較、仙台市の施策や市民活動を他市と比較する。対象とする施策は、「自然環境の保全」と「河川敷利用」に関するものである。具体的施策として、広瀬川創生プランや広瀬川管理計画を他県や他市の施策と比較し考察する。

「河川敷利用」と「自然環境の保全」に関する取り組みを県・市・企業と市民・NPO 法人にわけ、実施されている取組みを示したのが表１である。広瀬川に関してはNPO の活動も仙台市が主体的に関わっていることが特徴である。たとえば NPO 団体の「広瀬川の清流を守る会」や「広瀬川市民会議」が市とともに主体となって行っている広瀬川 1 万人プロジェクトがある。これは主に企業や市民が参加して清掃活動を行うといった内容である。こうした施策や活動と市民の河川利用との関係を調べるべく、アンケート調査を行った。比較する、他県の施策、「多摩川プラン」は、川崎市新総合計画の基本施策である「個性と魅力が輝くまちづくり」を実現するため、多摩川を市民共有の財産として再評価し、より豊かな河川空間の創出を目指すための計画として策定したものである。京都府の鴨川河川整備計画は、自然環境保全に関する目標、河川空間利用に関する目標などが含まれ、自然環境に影響を与える行為の監視の徹底や、利用者のモラル向上等の内容を示している。

表１　河川に関する施策と活動

施策の実施主体	内容	
宮城県	平成17年	広瀬川管理計画
仙台市	平成9年	杜の都環境プラン
仙台市	平成11年	仙台市水環境プラン
仙台市	平成17年	広瀬川創生プラン
仙台市＋市民	平成19年～	広瀬川1万人プロジェクト
広瀬川市民会議	平成18年～	広瀬川で遊ぼう
他県市		
川崎市	平成18年	川崎市多摩川プラン
京都府	平成22年	鴨川河川整備計画
スポーツ団体+NPO	平成14年～	多摩川ｴｺﾐｭｰｼﾞｱﾑ+川崎ﾌﾛﾝﾀｰﾚ
東京都･NPO	平成6年～	NPO荒川グリーンエイド

３．アンケート調査を用いた広瀬川の現状の把握

3.1　アンケート調査内容

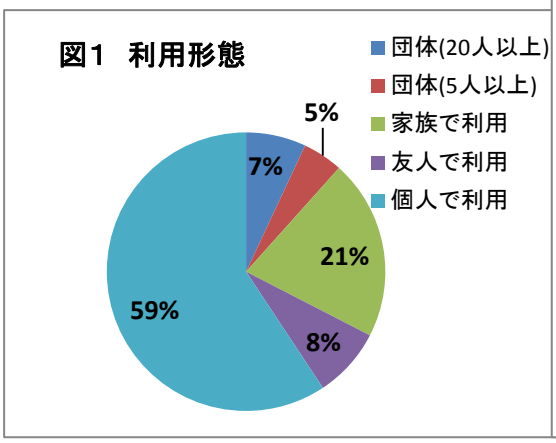
アンケート対象は仙台中心部の広瀬川周辺(河川から 300m 以内)住民である。調査ではまず回答者の年代と性別、広瀬川の河川敷・河川遊歩道の「利用」の有無を聞いている。次に利用者には、利用頻度、利用形態、利用目的を、非利用者には利用しない理由を質問。そして、河川敷の整備状況と緑などの自然環境の現状についての満足度、さらに今後の広瀬川に望むことおよび、過去や現在の施策と市民団体や取り組みに対する認知度を調査した。アンケートの配布は 1000 部、回収数は 116 枚、回収率は 11,6%である。

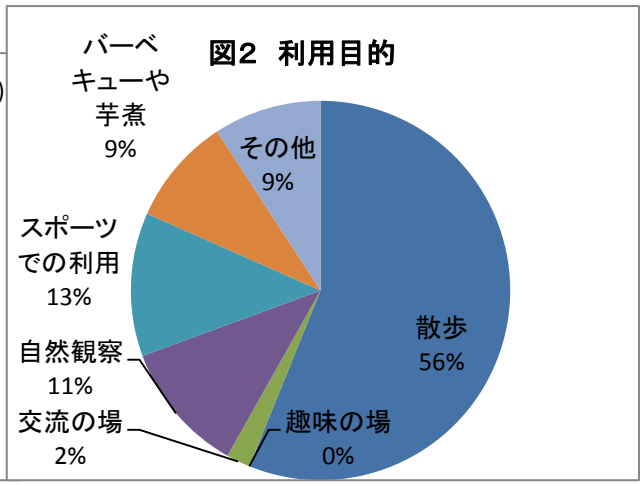
キーワード、広瀬川、河川敷・河川遊歩道、河川敷利用の促進、自然環境の保全

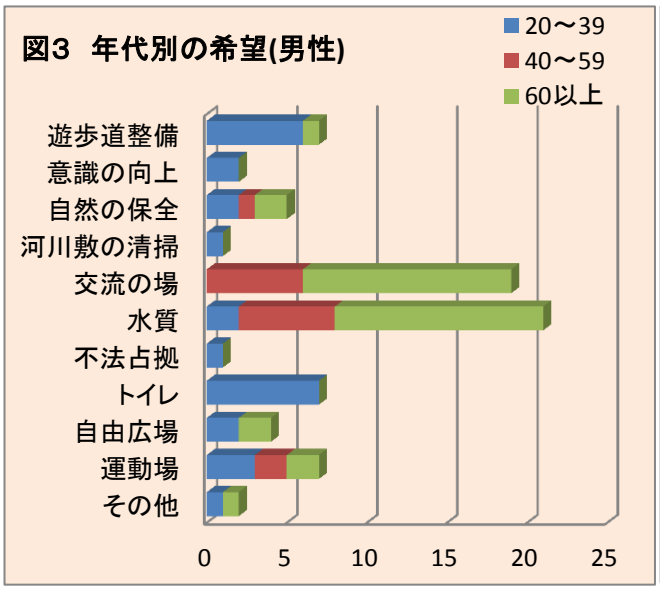
〒982-8577　仙台市太白区八木山香澄町 35-1　東北工業大学　工学部　建設システム工学科　TEL：022-305-3501

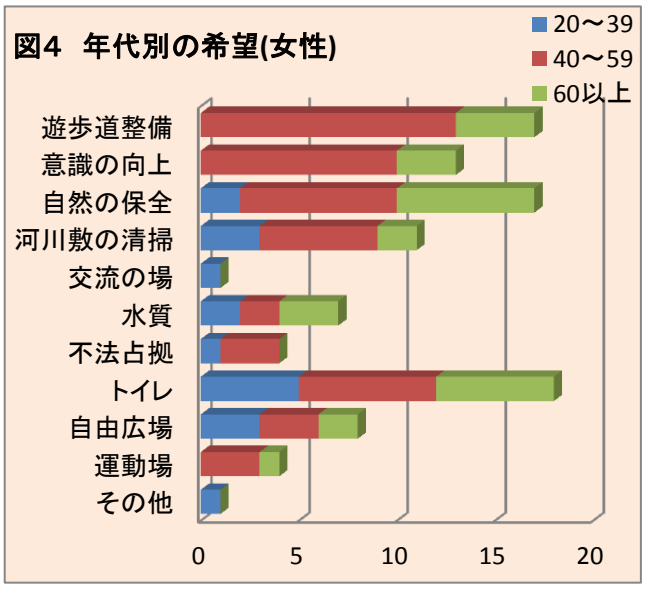
3.2　アンケート結果

アンケートの回答者は女性が 60%と多かった。利用形態は、個人利用が一番多く(図 1)、利用目的は散歩による河川利用が一番多い(図 2)。その後、現在の広瀬川に対する満足度と要望事項を女性での年代別と男性での年代別にわけ、クロス集計をした(図 3，4)。クロス集計の結果、男性の年代別希望では、40 歳以上の人達は「交流の場の整備」や「水質の改善」を希望する傾向が強かった。また、20 歳～39 歳までの人達は、特になにかに強く傾向することなく、平均的な推移となった。女性の年代別希望では、年代を問わず、「トイレなどの利便施設の整備」にかなり強い傾向が出ていた。そして、年代別に分けると、40 歳以上の人達は、「遊歩道の整備」や「広瀬川に対する意識の向上」や「自然の保全」に意見が偏り、20 歳～39 歳の人達は、「河川敷の清掃」と「レクリエーションなどの自由広場の設置」に少しだが意見が偏っていた。









4．研究のまとめ

アンケートの回答では河川敷の清掃の満足度は比較的、満足度が高い水準に位置していた。これは市や NPO 活動の成果である。しかし、アンケートで挙げられた不満や問題点を現在の施策ですべて解決できるわけではない。具体例をあげれば「広瀬川に対して望むこと」で一番多かったのは、トイレや休憩施設などの利便施設の充実であるが、利便施設は設置後の維持・管理の問題や、夜間利用時の安全上の問題にも関わってくる。このように、市民の不満を単純に解決するだけでなく、その先の問題も考慮しなければならない。今回の研究で、県や市の施策と市民の考え方や、望みに相違点が存在することがわかった。しかし、市民達が抱える不満や希望を聞き、改善することで、人々の広瀬川に対する興味や関心が高まり、河川利用の促進にもつながるだろう。また、今後は河川に興味を持たない人々も振り向かせるよう、魅力ある広瀬川を全員で作っていき、様々なニーズに応える川作りを目指していく必要があると考える。

参考文献

1）角野昇八他：アンケート調査に基づく都市の河川遊歩道の役割とその望ましい姿、土木計画学研究・論文集 No.27,2007